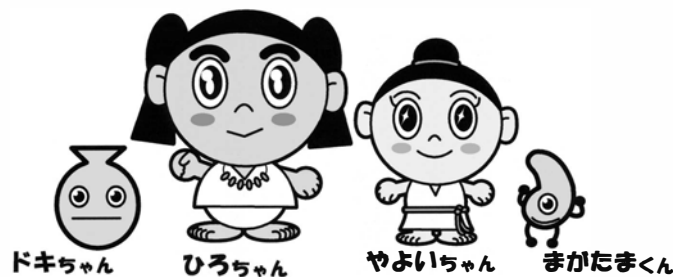


平成23年度 ひろしまの遺跡を語る
古代の東アジアとひろしま
ー白村江の戦いと寺町廃寺ー
記録集



平成24(2012)年
財団法人広島県教育事業団

平成23年度 ひろしまの遺跡を語る
古代の東アジアとひろしま
－白村江の戦いと寺町廃寺－
記録集



平成24(2012)年
財団法人広島県教育事業団

目 次

開会あいさつ	(1)
研究発表「古代ひろしまの渡来系遺物」 調査室長 伊藤 実さん	(2)
基調講演Ⅰ「朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々」 岡山理科大学 教授 亀田修一さん	(28)
基調講演Ⅱ「百済僧弘済の三谷寺をさぐる」 比治山大学 名誉教授 松下正司さん	(90)
シンポジウム「古代の東アジアとひろしま」 コーディネーター 広島大学大学院教授 古瀬清秀さん	(136)
(参考付図及び古代日朝交渉年表)	(154)
閉会あいさつ	(156)
企画・運営スタッフ 編集後記	(157)

平成23年度 ひろしまの遺跡を語る「古代の東アジアとひろしま」

【日程】平成24年1月21日（土） 10：00～16：00

【会場】広島県民文化センター 多目的ホール 広島市中区大手町1－5－3

【内容】

10：00～10：10 開会行事

10：10～10：40 研究発表「古代ひろしまの渡来系遺物」 調査室長 伊藤 実さん

10：40～12：00 基調講演Ⅰ「朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々」
岡山理科大学 教授 亀田修一さん

13：00～14：20 基調講演Ⅱ「百済僧弘済の三谷寺をさぐる」
比治山大学 名誉教授 松下正司さん

14：40～15：50 シンポジウム「古代の東アジアとひろしま」
コーディネーター 広島大学大学院 教授 古瀬清秀さん
パネラー 亀田修一さん，松下正司さん，伊藤 実さん

15：50～16：00 閉会行事
全体司会 主任調査研究員 沢元保夫さん
※関係出土品を会場のロビーで展示

<主催> 財団法人広島県教育事業団

<後援> 広島県教育委員会，広島市教育委員会，中国新聞社，NHK広島放送局

(表紙写真は，寺町廃寺復元模型（広島県立歴史博物館蔵・提供），
寺町廃寺の軒丸瓦（広島県立歴史民俗資料館蔵・提供）)

開会ごあいさつ

財団法人広島県教育事業団

理事長 大原 節雄

皆さん、おはようございます。本日は、「平成23年度ひろしまの遺跡を語る」を開催いたしましたところ、皆様には早朝から多数御参加いただき、まことにありがとうございます。



このひろしまの遺跡を語るという催しは、私どもが行った発掘調査の成果をいち早く県民の皆様に御紹介したいという思いから、昭和62年から始まり、本日お越しの皆様をはじめ、多くの考古学ファンの支えによって、今回で24年目を迎える新春恒例の文化イベントでございます。

さて、今回は、三次市の寺町廃寺にスポットをあてまして、古代の東アジア世界と広島のつながりを考えるというテーマで開催します。

まず、当事業団職員の研究成果の発表の後、古代の国際関係や寺院の研究がご専門の岡山理科大学教授の亀田修一先生と比治山大学名誉教授の松下正司先生の最新の研究成果に基づく基調講演をお願いしております。続いて、広島大学大学院教授の古瀬清秀先生のコーディネートによるシンポジウム「古代の東アジアとひろしまー白村江の戦いと寺町廃寺ー」で議論を深めたいと思います。

当事業団といたしましては、本日のような「ひろしまの遺跡を語る」などの機会を通しまして、日ごろの発掘調査の成果の公開に努めて参りたいと考えております。

今後とも、私どもの埋蔵文化財の調査、保存、そして継承への取り組みに対しましてご理解、ご支援をどうぞよろしくお願い致します。

平成24年 1 月 21 日

研究発表「古代ひろしまの渡来系遺物」

埋蔵文化財調査室長 伊藤 実

1 はじめに

皆さん、こんにちは。埋蔵文化財調査室の伊藤実と申します。きょうは、朝からたくさんおいでいただきまして、ありがとうございます。

きょうは最初に、私が今回のテーマ「東アジアとひろしまの遺跡」に即して「ひろしまの渡来系遺物」を取りあげます。

日本の古代史上、大変大きな出来事として歴史の教科書等にも必ず取り上げられており

ます西暦663年の白村江の戦い、今、画面に現在の白村江の写真が映っておりますが【スライド1】、その戦いに関わって、備後の三谷寺が造られたというお話が平安時代の物語に収録されています。この三谷寺、すなわち現在の三次市の寺町廃寺を今回の中心テーマに取り上げました。

さて、きょうの基調講演では、お二人の先生に寺町廃寺について、あるいは吉備・備後、朝鮮半島のお寺につきまして、大変雄大なお話が聞けると思いますけれども、その前座といたしまして、備後の三谷郡の郡長（大領）の先祖が663年に白村江の戦いに出かけるまでの間にも、この広島を含めて日本列島と朝鮮半島との間には人やモノの交流があったのだというようなお話で、露払い役を努めさせていただきます。

きょうの会場は少し大きいので、私のスライドは貧乏人がスライドをつくったものですから（笑）、スライドの写真や文字が小さかったりしますので、後ろのほうのお席の方はできましたら前のほうへ移っていただきますと、多少よく見えるかと思いますが、大変見えづらくっております。まずお詫びを申し上げて本日の話に移ります。



平成23年度「ひろしまの遺跡を語る」古代の東アジアとひろしま-白村江の戦いと寺町廃寺-

研究発表（10：10～10：40）

「古代ひろしまの渡来系遺物」

（財）広島県教育事業団 埋蔵文化財調査室 伊藤 実

発表の項目

- 1 何をもって渡来系遺物というか
- 2 広島県内で発見された弥生時代から奈良時代の渡来系遺物や遺構
- 3 渡来の時期と波
- 4 三谷郡の大領（郡長）の祖先たちはなぜ海を渡ったか？



白村江（白村江の戦いの舞台・現在の錦江（扶余付近））

倭国と百濟軍は、錦江の河口付近と想定される白村江で唐軍と戦い大敗した。

【スライド1】「古代ひろしまの渡来系遺物」

きょうのお話は、まず第1番目といたしまして、何をもって渡来系遺物というか、ということであります。「渡来系遺物」という用語は、皆さんにあまりなじみがないのではないかと思いますので、そのあたりをまず第1番目に解説しておきたいと思えます。次に、広島県内では弥生時代から奈良時代にかけて、渡来系遺物といわれるものが具体的にどういうものがあるのかというのを紹介したいと思います。

それから、3番目に弥生時代からいろんな渡来系の遺物が出てまいりますけれども、その出方に波があると言われておりまして、そのピークがいつごろで、何回ぐらいピークがあるのか、そのあたりの説明をいたします。それから、最後に三谷郡の大領、つまり郡の長官、正確には「その先祖」と平安時代の物語には書かれていますが、この人はなぜ海を渡ったのか。この4本立てで、うまくお話が進めばいいなと思っております【スライド1】。

では、まず第1番目に、何をもって渡来系遺物というかです。渡来系遺物といえ、何となく大陸（海外）から渡来したものというのはイメージとしてわかると思いますが、けれども、「渡来」という言葉とよく似た言葉で、少し前によく使われた「帰化」という言葉があります。いまスライドで映しておりますのは、配付の資料の1頁に書いてあることでございます【スライド2 上半】。

ここで「渡来」か「帰化」か、という用語の問題について少しご説明しておきますと、1950年代から60年代ごろには「帰化」という言葉がよく使われておりました。ところが1975年、昭和50年ごろ以降になると、教科書などでは「帰化」という言葉に変わって「渡来」という言葉が使われるようになります。それはなぜかと申しますと、「帰化」あるいは「帰化人」、いわゆる外国から日本にやってきて帰化した人（帰化人）という場合には、基本的には国家と国家、あるいは自分が国民であるという意識のもとに、ある国からある国へ移るといった意味合いを持つ言葉といわれております。

1 何をもって渡来系遺物というか

(1) 渡来か？ 帰化か？

- 1950～60年代は「帰化人」の用語が広く使われた。
1975年以降の教科書は帰化人→渡来人と書き換える。
- 「帰化」「帰化人」の用語は、国家・国民の意識を前提に、
政治的な意味合いも含む。
このため、律令国家成立以前の古代においては、
物理的な移動を示す「渡来」「渡来人」の用語を使うことが定着。

(2) 渡来系遺物とは？

- 稲作の伝来(弥生時代の開始)以降、日本の文化はほとんど渡来系。
- 大陸から渡来した人たちの足跡を探す手がかりは、渡来して日本に定着しなかったモノや定着する以前の大陸風の意匠や使用法などを残している遺物の探索である。
- 一般に古代の渡来人という場合、渡来人1世・2世あたりまでを意味し、2世以降は渡来人の子孫などとしたりするが、厳密にはわからない。彼らの使ったモノや技術、文化や、これに影響を受けて成立したと判断される古代の出土品が、渡来系遺物といわれているものである。

【スライド2】「1 何をもって渡来系遺物というか」

それは、自分が今いる国が気に入らなくて、隣の国のほうが自分の主義に合っているというような場合や、あるいは、他国の国情や制度を慕って別の国籍に変わるというような意味合い強く、これには中国古来の中華思想も深く関わっていると言われております。そういった国家や国民の意識と強く関わって「帰化」という言葉の定義がなされていますので、日本の弥生時代や古墳時代に国家があったか、なかったか、議論の分かれるところですが、大阪大学名誉教授（考古学）の都出比呂志先生は、古墳時代くらいから、初期国家と言ってもいいのだというふうにおっしゃられておりますけれども、日本の国家の成立というのは、3世紀なのか、5世紀なのか、7世紀であるか、いわゆる七五三論争というのがありまして、決着がついておりません。基本的には弥生時代、古墳時代というのは、まだ国家ができていない段階、あるいはできているかどうかわからない段階と捉えられておりまして、1975年ごろ以降は、人の物理的な移動を示す言葉として「渡来」「渡来人」という用語がよく使われるようになりました。つまり、朝鮮半島などの大陸から帰化したのではなく、渡来してきた人、すなわち渡来人であるという考え方です。また、文化が渡来してきた…というような言い方が一般的になりまして、現在に至っております。

こうした経緯で、最近では考古学では「帰化」を使う人はほとんどおられませんけれども、古代史を研究する上では、朝鮮半島や中国から物理的な人や物の移動だけで、歴史は進んできたのだと単純に考えるのも問題が多く、実際には「帰化」といえるような人の移動や政治的に日本の国に来た人もいたのではないかと考える古代史学者もおられますし、単に渡来や渡来人という用語で全部ひとくくりにするだけではいけないのではないかという意見も強くございます。ただ、土器であるとか、鉄の道具であるとか、そういう出土品から研究する場合、考古学的には、その物の由来が渡来か帰化という性格的な判断はできませんので、全部ひっくるめて物理的に移動してきた渡来系の出土品、あるいは渡来人の痕跡などとして、渡来人あるいは渡来系遺物というふうな言葉を使って、今はこれが考古学用語として半ば定着しています。

では渡来してきたもの、渡来系遺物とは何かということではありますが、日本の文化というのは、今現在の文化も多くがそうですけれども、日本で独自に発生したものは意外と少ないのが私たち日本の文化の特徴でもあります。特に古代史で言いますと、稲作文化も朝鮮半島からの渡来文化ではありますが、弥生時代の稲作が伝わって以降の文化というものは、ほとんどが渡来系の文化であります。その中で、これらの文化やそれを構成する道具などがいつ朝鮮半島や中国大陆から渡来したのかということを研究するときに、考古学では何を手がかりに探すかということ、渡来系遺物ということになります。渡来系遺物とは、日本に渡来してきて間もない遺物、つまり、まだ日本化していない中国大陆や朝鮮半島のデザインなどをそのままを残しているもの、そういうものが渡来系遺物と考えられておりまして、なかでも大陸からやってきた人が持ってきた直輸入品であれば、一番わかりやすいということになります。そういうものも点々と日本列島から出てくるわけでありまして、そういうものを探していきますと、そこに渡来人が朝鮮半島などからやってきたというのがわかってくるわけであります。このように渡来して間もないので、まだ日本に同化していないもの、出土品のなかでどうも大陸風のデザインなどを強く残していると考えられるものなどを探していきますと、こうした渡来系遺物がどこへたくさん入っているかというようなことがわかってまいります。一般に渡来系遺物というのは、渡来人とその子どもたち、あるいはお孫さんぐらいまで、これを渡来人1世、2世、3世と呼べるのかどうかはわかりませんが、だいたい考古学で渡来人という場合、渡来してきた1世、あるいはその子どもである2世、そのあたりまでは渡来人と言っておりまして、このような人が大陸や朝鮮半島などの故国から持ってきたものは、渡来したもの＝渡来系遺物といっているようです。また、こうしたものが日本列島に来て壊れたので、渡来人1世が日本で同巧のものをまた作ったりした場合、それらは大陸風のデザインなんかをよく残しているのが当然でありまして、これらを含めた渡来系遺物の出土地を探していきますと、渡来人1世、2世あたりがこのあたりで暮らしていたというのが推定できるわけであり

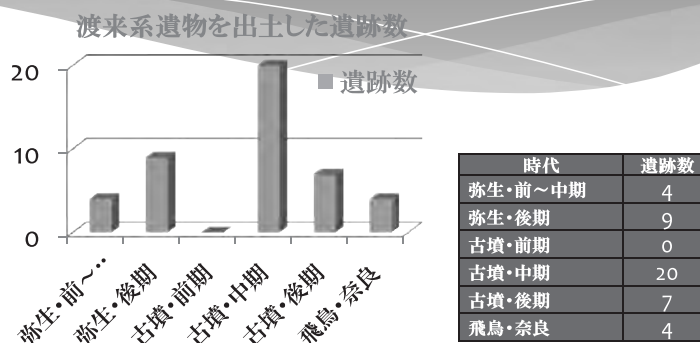
まして、そういうものを探して渡来人の足跡を追究してまいります【スライド2 下半】。

しかし、具体的に物に即して調べてみると、これが渡来人の2世が使ったものか、3世が使ったものか、4世が使ったものかというのは、なかなかわかりにくいのです。世代を重ねるごとに、渡来人の子孫もだんだん日本化していきますので、本来の形が崩れていくというような細かな変化を考古学では読み取っていく必要があるわけですし、大体、本日、御紹介します広島の渡来系遺物というのは、渡来人の1世、あるいは2世あたりまでが使ったのではなかろうかと思われるものと、これらに影響を受けて、日本で作られた渡来系と考えてもよさそうなものを御紹介します。このへんの色分けは非常にファジーでありまして、直輸入品もあれば、それから影響を受けて日本で作られたものもあるということで、すべてが大陸からの輸入品、あるいは第一次模倣品というわけでもありません。そういうことでございまして、具体的に広島の渡来系遺物について、どのようなものがあるかということですが、弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良時代に分けて、弥生時代には朝鮮半島特有の孔列文土器とそれから日本にはない鋳物の鉄器（鋳造鉄器）、それから獣骨でつくられた朝鮮半島風の弓矢のヤジリ（骨鏃）、それから古墳時代には須恵器の起源となった陶質土器、あるいは新しい鍛冶の道具、それからオンドル状カマド、朝鮮半島にはオンドルというのが現在でもたくさんありますけども、そういうものがこの時代に伝わってきております。

それから、飛鳥・奈良時代には、中国の唐三彩など特徴的なものがあります。それから白村江の戦いで負けた後、今度は新羅や唐が攻め込んでくるかもしれないという想定で西日本一帯に急造された朝鮮式の山城というのがあります。この種の山城の築造には、主に百済の人たちが築造に関与したと考えられておりますけれども、そういうものが広島県内にも造られておるようであります【スライド3 上半】。グラフや分布図にいたしますと、資料1頁の第1図表【スライド3 上半】や第2図表【スライド4】のようなになりまして、一番古いところは弥生時代の前期から中期の4遺跡、弥生時代の後期は9遺跡ぐらいあります。古墳時代前期は4世紀ごろですが、今のところ

2 広島県内で発見された弥生時代から奈良時代の渡来系遺物や遺構

- (1) 弥生時代……朝鮮半島特有の孔列文土器, 鑄造鉄器, 骨鏃など
- (2) 古墳時代……須恵器の起源となった陶質土器, 鍛冶具, オンドル状カマド
- (3) 飛鳥・奈良時代……唐三彩, 古代の文献に記された朝鮮式山城など



3 渡来の時期と波

- (1) 4世紀末～5世紀前半……朝鮮半島で高句麗・百済・新羅・伽耶諸国の抗争（日本列島に渡来人のもたらした影響）……須恵器やカマドなど伝来
- (2) 5世紀後半～6世紀前半……朝鮮半島で高句麗の南下政策により百済を圧迫（日本列島に渡来人のもたらした影響）……横穴式石室・須恵器の普及
- (3) 7世紀後半……朝鮮半島で唐・新羅連合軍と倭・百済の戦い（日本列島に渡来人のもたらした影響）……古代寺院や仏教文化の広まり

【スライド3】「2 広島県内で発見された弥生時代から奈良時代の渡来系遺物や遺構」
「3 渡来の時期と波」

ろ明確なものがありません。古墳時代でも中期になりますと、もっとも多く20遺跡を数えます。大体5世紀ごろの遺跡です。そして後期の6世紀ごろになると、7遺跡。飛鳥・奈良時代では4遺跡といった感じです。渡来系遺物を出土する遺跡数の推移については、全国的にも同じような傾向がありますが、古墳時代の中期に非常に多くなるという特徴があります。この時期（5世紀）は、日本の国は倭国と呼ばれ、また自称しておりましたけれども、中国の国々や王朝との間で交渉が大変盛んになった時代です。中国の歴史書『宋書倭国伝』には当時の倭国に「讃・珍・濟・興・武」という五人の王（倭の五王）があり、彼らが朝鮮半島を越えて中国・南朝の宋王朝に朝鮮半島の国々も従えることのできる将軍の称号を下さいと一生懸命お願いしてくるというようなことが書かれています。そういう時代に当たっております。平和的にも好戦的にも中国や朝鮮半島との対外的な交渉や交流が大変盛んになり、日本列島の人も渡

海して朝鮮半島に行くし、朝鮮半島、あるいは中国からも人がやってくるというふうな時代、これが5世紀ごろであります。少し整理しますと、渡来のピーク（波）が1，2，3波と言いますか、3時期ほどあるということです【スライド3 下半】。

第1波は、4世紀の終わりごろから5世紀の前半ごろ。これは朝鮮半島で高句麗、百済、新羅という国が互いに抗争している。そういう時代にあっておりまして、こうした朝鮮半島の抗争の中で、朝鮮半島の人たちが日本列島にやってくる。場合によっては、抗争に敗れて救いを求めてくるというようなことがあったのでしょうか、こうした半島内の混乱が日本列島への渡来の原因とも考えられています。

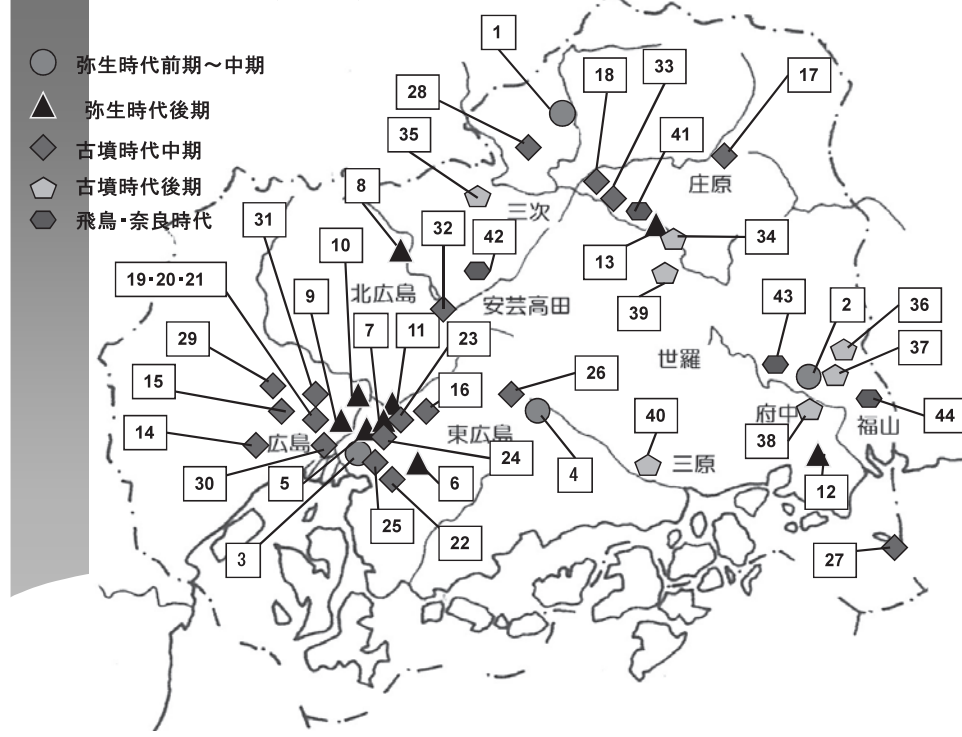
それから第2波は、5世紀後半から6世紀前半、これは当時の朝鮮半島に高句麗という国が今の北朝鮮のあたりにございましたが、非常に強大な国になりまして、南下政策を強力に推し進め、百済など朝鮮半島の南部の国々を圧迫してきます。こうした高句麗の南下政策の余波を受けて、朝鮮半島から日本に逃れてくる人々や、あるいは自主的に渡ってくるというようなことが第2波の主な要因と考えられています。

それから第3波、これがきょうのテーマに一番関わるのですが、7世紀の後半、663年に朝鮮半島で唐・新羅の連合軍と倭・百済の連合軍が白村江で戦いまして、一瞬にして倭国と百済の連合軍が敗北します。その後、百済の人たちがたくさん日本列島に渡ってくる。これが7世紀後半の第3波と言われております。この時期に多くの百済系の文化が日本に入ってきておりますが、日本列島に渡来人のもたらした影響としては、古代寺院の建立が盛んになるとか、仏教が地方に広まるとかというようなことも7世紀後半以降でして、それから確実な律令国家が成立するというのも7世紀後半以降のことです。

さて、広島県の渡来系遺物について、時代ごとに今、大まかな流れをご紹介しますけれども、時代ごとの分布図にしますと次のようになります【スライド4】。●マークが弥生時代の前期から中期の4遺跡です。分布図の各番号は、資料2頁の第3図表の一覧表（本書の10頁下半に掲載）の番号と一致します。この一覧表はスライドには

ひろしまの渡来系遺物・遺構の分布

- 弥生時代前期～中期
- ▲ 弥生時代後期
- ◆ 古墳時代中期
- ◇ 古墳時代後期
- 飛鳥・奈良時代



【スライド4】「ひろしまの渡来系遺物・遺構の分布」

第3図表 広島県内出土の渡来系遺物・遺構一覧

番号	時代	遺跡名	所在地	渡来系遺物・遺構	文献
1	弥生・前	建釜遺跡	庄原市高野町高暮	孔列文土器	高野町『高野町史』2005年
2	弥生・前	大地(おおじ)2号遺跡	福山市新市町常	孔列文土器?	未報告(2005～2006年度福山市埋蔵文化財調査団調査)
3	弥生・前～中	中山遺跡	広島市東区中山東	銅造鉄斧	野島永『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』2008年
4	弥生・中	西本6号遺跡	東広島市高屋町大島・杵原	銅造鉄斧(SB8・10b・11b)	(財)広島県埋文センター『西本6号遺跡』1997年
5	弥生・後	西山貝塚	広島市東区戸坂・牛田早稲田	骨鏝(三稜形)	松崎寿和『広島県史(考古編)』1979年
6	弥生・後	成岡A地点遺跡(3号墓)	広島市安芸区中野東	骨鏝形鉄鏝	(財)広島市文化財団『成岡A地点遺跡』2001年
7	弥生・後	西順寺遺跡D地点	広島市安佐北区口田	銅造鉄斧・曲刃鏝・板状鉄斧ほか	広島県教委『西順寺遺跡群』1974年
8	弥生・後	京野遺跡	北広島町今田	銅造鉄斧(SB25)	(財)広島県埋文センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』1998年
9	弥生・後	大谷遺跡	広島市安佐南区祇園	銅造鉄斧(A地点4号住居跡)	広島市教委『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984年
10	弥生・後	大町七九谷遺跡	広島市安佐南区大町	銅造鉄斧(A地点SH7, B地点SH4・素環頭刀子(B地点墳墓群))	(財)広島市文化財団『大町七九谷遺跡群』1999年
11	弥生・後	梨ヶ谷B地点	広島市安佐北区口田	曲刃鏝・板状鉄斧ほか	(財)広島市歴史科学教育事業団『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』1998年
12	弥生・後	本谷遺跡	福山市津之郷町	貨泉	福山市教委『本谷遺跡発掘調査概報』1973年
13	弥生・後	油免遺跡	三次市三良坂町灰塚	鉄素材(SB43)・大壁建物?(SB15)	(財)広島県埋文センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(N)～油免遺跡の調査～』2003年
14	古墳・中	城ノ下第1号古墳	広島市佐伯区五田市	金銅製垂飾	(財)広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991年
15	古墳・中	空長古墳群	広島市安佐南区山本	堅穴系横口式石槨・鉄鏝	広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』1978年
16	古墳・中	地蔵堂山第1号古墳	広島市安佐北区落合	銅造鉄斧	広島県教委『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
17	古墳・中	田尻山第14号古墳	庄原市山内町	陶質土器(縄文)	広島県教委『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』1978年
18	古墳・中	四拾貫小原第1号古墳	三次市四拾貫町	陶質土器(縄文)	新谷武夫『安芸・備後の古式須恵器』『古文化談義5』1978年
19	古墳・中	池の内第2号古墳	広島市安佐南区長東西	又鍬(馬鍬)	広島市教委『池の内遺跡発掘調査報告』1985年
20	古墳・中	池の内第3号古墳	広島市安佐南区長東西	陶質土器(把手付短頸壺)	広島市教委『池の内遺跡発掘調査報告』1985年
21	古墳・中	池の内第1号主体(甕棺墓)	広島市安佐南区長東西	陶質土器(甕)	広島市教委『池の内遺跡発掘調査報告』1985年
22	古墳・中	砂走遺跡	広島市安芸区中野	陶質土器(把手付短頸壺)	新谷武夫『台付把手壺考』『考古論集～潮見浩先生退官記念論文集～』1993年
23	古墳・中	水落古墳	広島市安佐北区可部	陶質土器(高杯)	安間拓巳『広島県出土の古式須恵器』『古文化談義第65号～(2)』2010年
24	古墳・中	大久保古墳	広島市安佐北区口田南	陶質土器?(甕・高杯)	(財)広島県埋文センター『山陽自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)』1987年
25	古墳・中	大明地第3号古墳及び周辺	広島市安佐北区口田	陶質土器?(壺)	(財)広島県埋文センター『山陽自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)』1987年
26	古墳・中	浄福寺2号遺跡	東広島市高屋町高美ヶ丘	陶質土器(小型甕)・土師器(鈎底甕SB30, SX17)	(財)広島県埋文センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ』1993年
27	古墳・中	宇治島北の浜遺跡	福山市走島町宇治島	陶質土器?(縄文)	川越哲志『福山市宇治島の考古資料(Ⅰ)』『内海文化研究紀要第11号』1983年
28	古墳・後	曲2号古墳	庄原市口和町金田	鍛冶具(鑿)・多角形袋式鉄矛	(財)広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ6)曲第2～5号古墳』2011年
29	古墳・中	寺山第3号古墳	広島市安佐南区山本	鏡、鍛冶具(鉄鏝)	(財)広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』1997年
30	古墳・中	権地古墳	広島市安佐南区長東西	鉄製鈴(ヤス)	広島市教育委員会『九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』1984年
31	古墳・中	三王原古墳	広島市安佐南区祇園	金環、鍛冶具(鉄鏝)	中田昭『広島市祇園町三王原古墳について』『芸備第1集』1973年
32	古墳・中	新宮遺跡群	安芸高田市八千代町勝田	鳥形土器(土師器)	八千代町教委『新宮遺跡群発掘調査報告書』2000年
33	古墳・中	三重1号遺跡	三次市四拾貫町	オンドル状遺構(L字状カマド)	(財)広島県教育事業団『(平成21年度)中国横断自動車道尾道松江線建設に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会～資料～』2010年
34	古墳・後	油免遺跡	三次市三良坂町灰塚	オンドル?状遺構(石蓋壁溝)	(財)広島県埋文センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅳ)～油免遺跡の調査～』2003年
35	古墳・後	上野部古墳	安芸高田市高宮町野部	鍛冶具(鉄鏝)	未報告(広島県立歴史民俗資料館蔵)
36	古墳・後	大迫古墳(金環塚)	福山市駅家町	金環	府中高校地歴部『古代吉備品治国の古墳について』1967年
37	古墳・後	松原第2号古墳(駅家住宅団地)	福山市駅家町	鉄鏝	県教委『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976年
38	古墳・後	栗柄町内の古墳	府中市栗柄町	指輪	広島県立歴史民俗資料館『くらしと道の歴史～中国山地の鉄・塩・銀の道～』1999年
39	古墳・後	梅の木古墳	三次市吉舎町敷地	陶質土器(小型甕付壺・有蓋高杯の蓋など)	未報告(広島県立歴史民俗資料館蔵)
40	古墳・後	土肥谷古墳	三原市本郷町本郷	鶏冠頭大刀	新谷武夫『環状柄頭研究序説』『考古論集～慶松崎寿和先生六十三歳論文集～』1977年
41	飛鳥・奈良	寺町廃寺	三次市向江田町	唐三彩水注	三次市教委『備後寺町廃寺～推定三谷寺跡第2次発掘調査概報～』1981年
42	飛鳥・奈良	明官地廃寺	安芸高田市吉田町中馬	銅製指輪	吉田町教育委員会『明官地廃寺跡一試掘調査概要』1985年
43	飛鳥・奈良	常城	府中市山本町	朝鮮式山城?	『続日本紀』に記載(遺跡は未確認)
44	飛鳥・奈良	茨城	福山市千田町・蔵王町	朝鮮式山城?	『続日本紀』に記載(遺跡は未確認)

時代表示の目安 弥生・前(弥生時代前期・BC5～4世紀)、弥生・前～中(弥生時代前期～中期・BC3～1世紀)、弥生・後(弥生時代後期・1～3世紀)
古墳・前(古墳時代前期・4世紀)、古墳・中(古墳時代中期・5世紀)、古墳・後(古墳時代後期・6～7世紀前半)、飛鳥・奈良(7世紀後半～8世紀)

- 1 弥生～古墳時代の日本列島に流入した中国・朝鮮半島産の銅鏡(いわゆる舶載鏡)については、渡来人による直接的な持ち込みも考えられるが、多くが北部九州や近畿地方の首長層を介して各地に再配布されたものも多いと考えられ、これら舶載鏡類が直接的に渡来人や渡来人と接触した人と結びつくとはいえないことから、今回のひろしまの渡来人に係る渡来系遺物の集成からは除外した。(広島県内出土の弥生～古墳時代の銅鏡については、国立歴史民俗博物館『研究報告第56集』1994年がある。)
- 2 このほかに以下のものがあるが、出土場所等の特定が困難なことから、除外した。
 - (1) 伝広島市白木町井原出土の陶質土器(壺・蓋・高杯)
 - (2) 伝福山市新市町相方古墳の陶質土器(有蓋高杯)
 - (3) 伝福山市本谷3号古墳出土の白玉製釧(明治40年ごろ出土・福山市教委『本谷遺跡発掘調査概報』1973年)

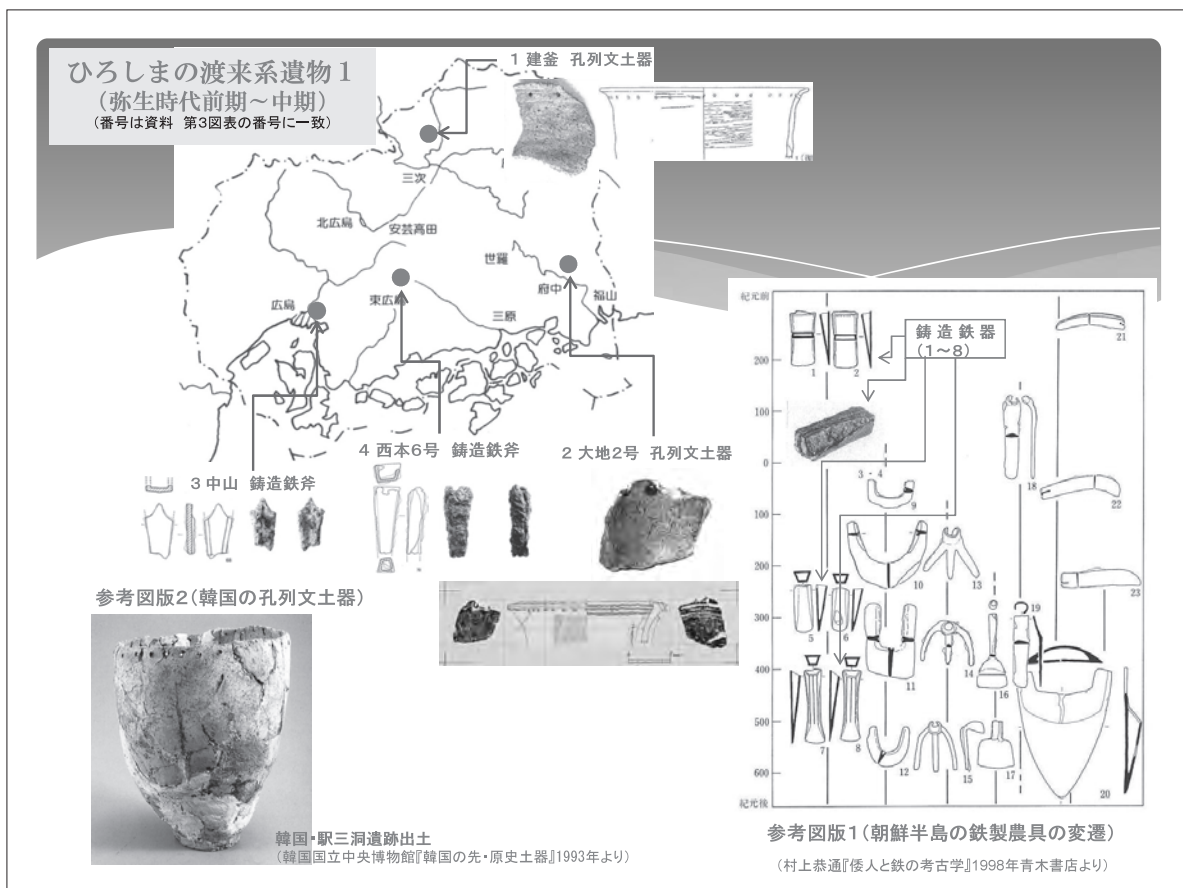
出ませんので、資料をご参照下さい。次に弥生時代の後期は、▲マークです。広島湾岸のあたりを中心に増えてまいります。それから、次に古墳時代の中期、5世紀ごろについては、◆マークで示していますが、22遺跡あります。棒グラフ【スライド3上半】で一番高かったところです。これもやはり広島湾岸に、◆マークが集中しています。次に集中しているのが、県北の三次・庄原の4遺跡が特徴的です。なぜか、備後の南部のあたりは非常に少ない。27番は福山市走島町の宇治島という小さな無人島にある遺跡ですが、朝鮮半島の土器が1点だけ出ております。

ところが古墳時代後期(●マーク)になりますと、広島湾岸ではほとんど出なくなり、三次から府中、三原にかけてのいわゆる備後のあたりに渡来系の遺物がたくさん出てくる。次の飛鳥・奈良・平安時代(●マーク)には、はっきりしたものは少なくなるのですが、寺町廃寺の唐三彩や朝鮮式山城の記録なんかであります、それも広島湾岸ではなくて、備後に集中している。これは後ほどの亀田先生の話とも関連するかもしれませんが、当時の広島県域に渡来系の文化が入ってくる窓口的な地域が、古墳時代の中期から後期の境目で大きく変わってくるというのが、この分布図でお気づきになった方もおられるのではないかと思います、古墳時代中期ごろまでは地理的に朝鮮半島に近い広島湾岸を一つの窓口として渡来系の遺物が多く入っておりますけれども、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代になりますと、どうも吉備のあたり、備後のお隣は吉備の本拠地・備中(岡山県)でして、吉備の本拠地を大きな窓口として渡来系の遺物が入ってきている可能性が考えられるのではないかと思います。今回集めました資料からだけでありますが、少し面白い傾向が見て取れるのではないかと思います。

では、大急ぎで広島県の渡来系遺物について具体的にスライドでご紹介していきます。配付の資料にも写真と図面で紹介をしておりますが、スライドの方はカラーになっているというところが違うだけであります。

まず、弥生時代の前期から中期のもっとも古い時期のものから紹介しますと、庄原市高野町の建釜（たてがま）遺跡や福山市新市町の大地（おおじ）2号遺跡で孔列文土器という少し変わった呼び名の土器が見つかっています。これらは口縁部にたくさん小さな穴が開いている土器で、朝鮮半島にぱりぱりの完全な形のものがあります（【スライド5】－参考図版2）。一般には煮炊きに使う甕の一種でありますけども、何のために穴を開けたかわかりませんが、口縁部に並べて小さな穴がたくさん開いている朝鮮半島特有の孔列文土器と呼ばれているものです。こうした渡来系の土器が福山や庄原などでわずかですが見つかっています。

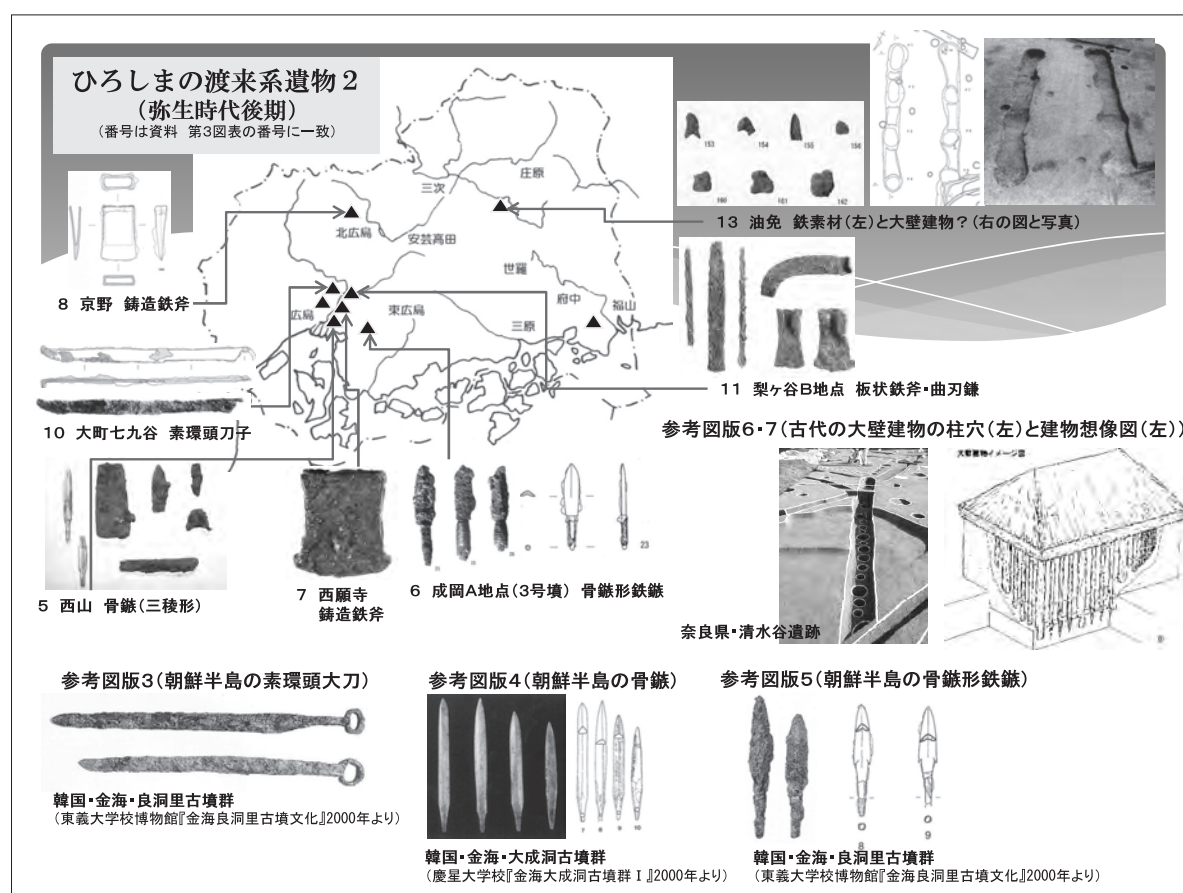
同じ時期（弥生時代前期～中期）の鑄造鉄器は、全体の形がわかりにくいのですが、明らかに鑄物の鉄器（鑄造鉄器）でありまして、当時の日本では作られていないものです。中国大陸を起源とする鉄の道具の破片です。日本には道具としてというより、スクラップ（鉄の素材）として入ってきた可能性も考えられますけれども、これ（【ス



【スライド5】「ひろしまの渡来系遺物 1（弥生時代前期～中期）」

ライド5】－参考図版1）は、朝鮮半島の鉄製農具の変遷図ですが、朝鮮半島には紀元前からずっと鑄物でつくられた鉄の斧（鑄造鉄斧）があります。こういうものの破片が、弥生時代の古いころから広島だけではなく九州から瀬戸内にかけての日本列島に入ってきています。

それから弥生時代の後期（【スライド6】）になると、広島市東区の西山遺跡というところから、朝鮮半島の南部によくみられる獣の骨でつくったヤジリ（骨鏃）が見つかります（【スライド6】－5）。これは断面を見ますと三角形になっておりまして、非常に鋭くできております。これは、朝鮮半島の釜山の近くにある金海というところの大成洞古墳群の骨鏃（【スライド6】－参考図版4）と全く同じものでありまして、もしかすると西山遺跡のものは朝鮮半島から輸入されたものかもしれませんが、そういうものが広島湾を望む標高250m ぐらいの山頂にある高地性集落である西山遺跡（貝塚）で見つかっています。



【スライド6】「ひろしまの渡来系遺物2（弥生時代後期）」

それから広島市安佐南区の大明七九谷遺跡では、鉄のナイフの柄の先端に環頭と呼ばれる円環が付いていたと思われる素環頭刀子が見つかっています（【スライド6】－10）。これも中国を起源としまして朝鮮半島にたくさんある鉄のナイフで、大きなものは素環頭大刀といわれるものもあります（【スライド6】－参考図版3）。次は、骨鏃の形を鉄で作った骨鏃形鉄鏃とよばれるもので、日本では大変珍しいものです。鏃の断面を見ていただくと「へ」の字形になっておりまして、一般の鉄鏃にはない骨鏃特有の形を残しています（【スライド6】－6）。これは広島市安芸区の成岡A地点遺跡（3号墳）から見つかったものです。これと同じものが、やっぱり韓国の金海の良洞里古墳群（【スライド6】－参考図版5）で出てきておりまして、成岡A地点遺跡のものは直輸入に近いものではないかと考えられております。

それから（【スライド6】－13）の左側の鉄素材としたものは、三次市の三良坂町の油免遺跡から出てきた鉄の破片ですが、この鉄片の組織や化学組成を分析したところ、すべて朝鮮半島産の良質の鉄であることがわかっておりまして、こうした小さな鉄の素材も朝鮮半島から輸入されてきたものであることがあらためて確認されています。その鉄片の右横に図面（【スライド6】－13の右側）で示したのが、同じ油免遺跡から見つかりました溝を掘った中に柱を立てたのではなかろうかと言われるちょっと変わった建物跡の可能性のあるものです。この種の建物跡ではっきりしたものが近畿地方の奈良県・清水谷遺跡というところから出ておりまして（【スライド6】－参考図版6・7）、参考図版7（右側）をご覧くださいと、細長く溝を掘った中へ柱穴がたくさん並んでおりまして、これを復元しますと参考図版6（左側）のような柱を芯にして土壁を塗った壁建ちの家屋が復元できまして、いわゆる大壁づくりの家が復元できます。これは現在でも使われている家屋の基本的な造り方でして、大壁造り工法と呼ばれておりますけれども、こうした現代の大壁建物の最も古い形のものが、古墳時代に朝鮮半島から日本列島に伝来してきております。朝鮮半島など日本より北に位置して冬の寒さが厳しいところでは、冬の寒さを防ぐ、非常に有効な建築工法で

あったといわれております。こうした先進的な建築工法の可能性が考えられる遺構が、この油免遺跡で見つかっています。ただ油免遺跡の遺構は上部が削られておりまして、大壁造りの建物痕跡と断定するにはちょっと遺構の残りが悪いのですが、こうしたものの可能性が考えられるちょっと不思議な形の柱の穴が油免遺跡で見つかっているということをご紹介しておきます。

ほかに（【スライド6】－8）は、北広島町今田の京野遺跡から見つかった鑄造鉄斧ですが、弥生時代の後期ごろの遺跡からは、鉄の道具類はそれほど豊富に見つかりませんけれども、同じ時期の広島市安佐北区の梨ヶ谷B地点遺跡では、随分立派な朝鮮半島直輸入品ではないかと思われる鉄の鎌や鍬、斧などが墳墓の中にたくさん副葬されていました（【スライド6】－11）。この時代には、広島湾を瀬戸内の窓口として、朝鮮半島の進んだ鉄の文化や道具が入ってきたことがうかがわれます。

さて次の古墳時代（【スライド7】）になりますと、こうした広島湾の窓口的役割が一段と増すものと推測されますが、古墳時代前期の様子は全体的に明らかなものはありません。渡来系の遺物がたくさん出てくるのが、これに続く古墳時代中期になりますけれども、推定したような状況が確認できます。まず広島湾の周辺では、（【スライド7】－19～21の上や22）のような陶質土器と呼ばれる日本の須恵器の手本になったものがいくつか見つかっています。これらは朝鮮半島で見つかる陶質土器と作り方や文様、焼きの質などが大変よく似ておりまして、（配付の資料5頁－参考図版16）は韓国の高麗・池山洞の古墳群から出てきたものですが、これらと全く瓜二つといってよいものも日本で見つかっています。さらに、この時代に登場する新しい鉄の道具として、日本では出土例が10例あるかないかの三又鍬（又鍬）も広島市の古墳から出土しています（【スライド7】－19～21の下）。朝鮮半島の古墳からは割とよく見つかる鉄の又鍬ですが、開墾には大変威力を発揮したといわれている革新的な鉄製農具です。こうした陶質土器や又鍬が広島市安佐南区の池の内古墳群（【スライド7】－19～21）から見つかっています。



【スライド7】「ひろしまの渡来系遺物3 (古墳時代中期)」

古墳時代中期には、それまでなかった調理方法として、カマドを使う調理方法が新しく導入されますけども、カマドは、下で火を焚いて、カマドに掛けた甕（鍋）の中で湯を沸かして、その上に載せた甑と呼ばれる土器の中のお米や穀物などを蒸して調理する、いわゆる蒸し料理の調理道具です（【スライド7】－参考図版13）。その調理道具で欠かせないのが下に蒸気を通す穴を開けた甑と呼ばれる土器です。いわゆる蒸し器であります。そういう新しい調理器具がセットで朝鮮半島から導入されています（【スライド7】－参考図版12）。本場の朝鮮半島の蒸し器（甑）は、蒸気を通す穴が一つではなく複数あるのが特徴（【スライド7】－参考図版11）でありまして、日本に定着して以後は大きな穴が一つになってしまいます。日本に伝わって間もない甑は、まだ本場朝鮮半島の形の特徴を残していて、蒸気を通す穴が複数あります。東広島市の浄福寺2号遺跡で見つかった甑（【スライド7】－26）は、多少日本化していますが、複数の穴があげられて朝鮮半島の甑の遺風を残しているものです。カマドそ

のものも朝鮮半島から渡来したのですが、日本と朝鮮半島では構造上大きな違いは見られませんので、甑の形にこうした朝鮮半島の遺風を残しているものを、渡来系遺物として特に取り上げています。

それからカマドのなかでちょっと変わったオンドル状遺構（L字状カマド）と呼ばれるものが、三次市四拾貫町の三重（さんしげ）1号遺跡から見つかっています（【スライド7】－33）。オンドル状遺構（L字状カマド）とは、竪穴住居の側壁に取り付けられたカマドの煙道を住居の側壁に沿って延長して煙道を長くして、カマドを上から見た時にはL字状に近い形に見えるカマドのことです。カマドの煙がこのL字状カマドの中を通るとき、煙の暖かさで煙道を暖めてそこから放射される熱で住居全体に暖かさが伝わってくる仕掛けになっています。こうした原始的なオンドル機能を持たせた特殊なカマドも朝鮮半島からこの時期に伝わったものであります。これはその後の日本家屋の設備として定着しませんでした。古墳時代に新しい家屋設備として渡来したオンドル状遺構ではないと考えられるものが、このL字状カマドであります。オンドル状遺構については、後ほどもう少し詳しく触れたいと思います。

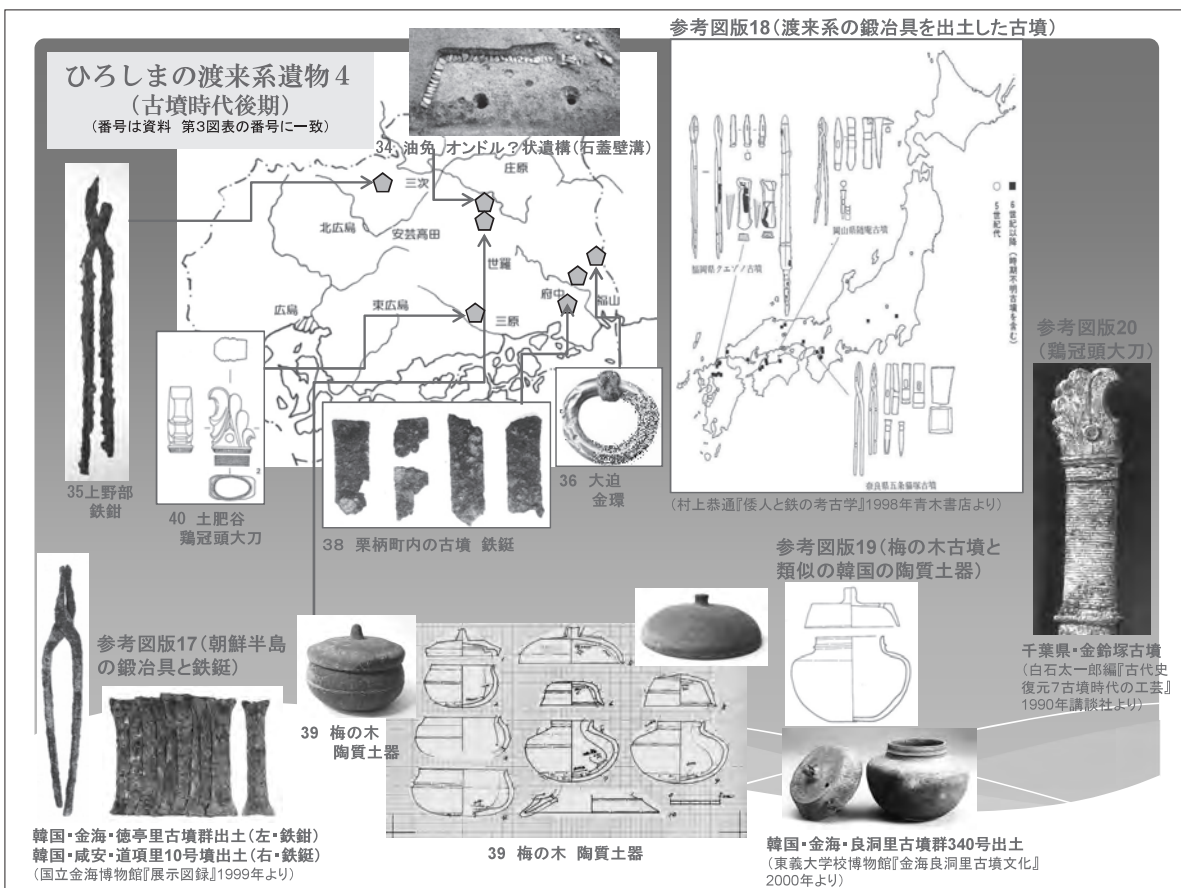
さて、朝鮮半島にも非常に多い鳥形の土器が、安芸高田市の新宮遺跡から見つかりております（【スライド7】－32）。鴨形をした器体の背中に口縁を取り付けた形など、朝鮮半島のもの（【スライド7】－参考図版8）によく似ています。

また5世紀の古墳時代中期には、鍛冶の道具や鍛冶技術も新たに入ってくるのですが、鉄鎚や鑿など、近代の鍛冶屋の道具と同じ形のものがこの時代に入ってきておりまして、大きな鑿は庄原市口和町の曲第2・3号古墳から出土したもの（【スライド7】－28）、鉄鎚は図面で示しておきましたが広島市安佐南区の寺山第3号古墳から見つかったものです（配付の資料4頁－29）。こうした新しい鍛冶具を使って、これまでにない鉄の武器・武具や農工具が作られたのがこの時期です。

この時期の珍しい金工品として、広島市佐伯区の城ノ下第1号古墳から見つかった金銅製の髪飾り（かみかざり）があります（【スライド7】－14）。日本では類例が知

られておりませんので、恐らく朝鮮半島から直輸入された製品だろうと推定されます。

次に古墳時代後期になりますけども、（【スライド8】－35）は鍛冶具の鉄鉗（かなはし）と呼ばれるものです。鍛冶屋さんが熱く熱した鉄を挟んで移動させるときに使う道具です。これが県北部の安芸高田市高宮町の上野部古墳から見つっています。また鉄の素材となった鉄鋌と呼ばれる鉄板が府中市栗柄町の古墳から見つっています（【スライド8】－38）。これはこの時代に鍛冶の技術とともに鉄の地金として朝鮮半島から日本列島に大量に輸入されたものといわれています。（【スライド8】－参考図版17）には、朝鮮半島南部の金海（きんかい）や咸安（かんあん）の古墳から見つかった鉄鉗や鉄鋌の写真を掲載していますが、よく似ています。また（【スライド8】－参考図版18）には、日本でこうした鍛冶具のセットを出土する古墳の分布図を掲載していますが、この時代の西日本一帯に新しい鍛冶具を携えて朝鮮半島から新しい鍛冶の技術を持った人たちがやってきていたことを強く伺わせる様相がよくわかると思



【スライド8】「ひろしまの渡来系遺物4 (古墳時代後期)」

います。広島県内でも、こうした当時の西日本の動向とよく合致するような出土品が見つまっているということでもあります。

これは最近わかったのですが、三次市吉舎町の敷地にあります梅の木古墳というところから、日本の須恵器にしてはちょっと形が変わったものが出土しています。

（【スライド8】－39）の須恵器は、一般的な日本の須恵器の形と比べると、特につまみの部分の形が少し違っておりまして、よく似た形のつまみを持つ土器が朝鮮半島の金海あたりの古墳から見つかっておりまして（【スライド8】－参考図版19）、土器の全体の形や機能にほとんど関わりのないつまみの部分の形がこれだけ似ているのは、ひょっとすると朝鮮半島で焼かれた土器ではないかと思っております。想像をたくましくすれば、朝鮮半島へ出かけて行った人が、ちょっとお土産に持って帰ったか、朝鮮半島から渡来してきた人が交易品ではなく自分たちが使う日常の品として持ってきたものではないかとも思われます。古墳時代の中期以降は日本列島の人たちも、割と気軽に朝鮮半島に出かけていったようでありますので、こうした日常の品も日本列島に入ってきていてもおかしくないのではないかと思います。

この時期の渡来系遺物としてちょっと珍しいものとして、（【スライド8】－40）は三原市本郷町の土肥谷古墳から出てきたと言われる鶏冠頭大刀の柄頭です。残念ながら実物は現在所在不明になっておりますが、図面だけが残っております。全体の形は千葉県で完全な形のもの（【スライド8】－参考図版20）が出てきておりますが、鶏の鶏冠（とさか）のような形の飾りを刀の柄頭につけたものです。朝鮮半島南部の百済からもたらされた可能性も指摘されている大陸風の古墳時代の大刀です。

一方、古墳時代の耳飾りである金環や銀環は割とよく古墳から出土しますが、純金製の金環は珍しいものです。（【スライド8】－36）は、福山市駅家町の大迫金環塚古墳から見つかったものですが、純金の金環です。一般的に古墳時代の金環などの耳飾りは、芯が銅製で表面を金や銀でメッキしてあるのが普通ですが、こうした純金製の金環は、朝鮮半島からの渡来系遺物あるいはその影響が非常に強い製品といわれてい

ます。

（【スライド8】－34）はオンドル？状遺構としておりますが、先ほど古墳時代中期のところで紹介しました三重1号遺跡のオンドル状遺構（L字状カマド）とは違った不思議な遺構が、三次市三良坂町の油免遺跡で見つっています。これは竪穴住居の壁溝の上に石が被せてあるちょっと変わった遺構でして、その端には石で造ったカマドがあるので、オンドル状遺構の変形したものの可能性も考えられた遺構です。

オンドルは韓国では現代でも使われておりまして、典型的な韓国の近代のオンドルの構造を、（【スライド9】－参考図版15）に示しています。その構造は、床の下にカマドの煙を通し、屋外の煙突から煙を出すというもので、床の下をカマドの煙が通るために、床全体が暖かくなるという床暖房であります。こうしたオンドルは、冬の寒さが厳しい朝鮮半島には古くからあったと言われておりまして、古墳時代以降、朝鮮半島の渡来人がたくさんやってきた近江（滋賀県）地方の穴太（あのを）遺跡では、（【ス

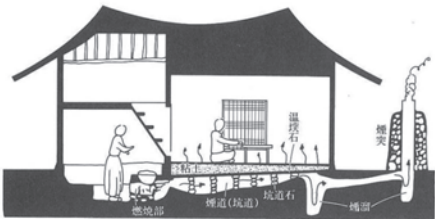


33 三重1号 オンドル状遺構(L字状カマド)



34 油免 オンドル？状遺構(石蓋壁溝)

参考図版15(朝鮮半島の近代のオンドル模式図)



(林博通「オンドルについて」『高句麗の都城遺跡と古墳』1992年同朋舎出版より)

古代の渡来系の設備
(オンドル状遺構)

参考図版14(朝鮮半島の古代オンドル模式図)



(滋賀県立安土城考古博物館『いにしへの渡り人』1996年より)

参考図版21(渡来系のオンドル遺構)



滋賀県・穴太遺跡 (滋賀県立安土城考古博物館『いにしへの渡り人』1996年より)

【スライド9】「古代の渡来系の設備（オンドル状遺構）」

ライド9】－参考図版21）のような石造りのオンドル遺構といわれるものが見つっています。これと比べると、油免遺跡のものは石造りである点は共通していますが、カマドの煙を通したと考えるには構造的に無理があるようでして、油免遺跡のオンドル？状遺構は今のところ石蓋壁溝としておき、その性格についてはクエスチョンとしておきたいと思います。

次に飛鳥・奈良時代（【スライド10】）については、きょうの本題でもあります三次市の寺町廃寺からは唐三彩など非常に珍しいものも出土しています（【スライド10】－41）。この唐三彩は、晩唐期（9世紀半ば～10世紀初頭）のものといわれておりまして、正確には平安時代に渡来したのですが、破片から復元される形は（【スライド10】－参考図版25）に示しておりますような長頸の台付き水注です。当時の地方寺院では大変珍しいものだったようです。

**ひろしまの渡来系遺物5
（飛鳥・奈良時代）**
（番号は資料 第3図表の番号に一致）

42 明官地 指輪

参考図版22(明官地の奈良三彩・火舎)

（吉田町教育委員会『明官地廃寺跡-試掘調査概要-』1985年より）

41 寺町 唐三彩

参考図版23(明官地の軒丸瓦)

（吉田町教育委員会『明官地廃寺跡-試掘調査概要-』1985年より）

43 常城(府中市)
44 茨城(福山市)
【続日本紀】
《養老三年(719)十二月戊戌》
○戊戌(つちのえいぬ)。停(とどむ)備後国
安那郡茨城。葦田郡常城。

参考図版25(寺町の唐三彩と同種の完形品)

東京国立博物館所蔵
三彩貼花文長頸壺（唐・8世紀）
（広島県立歴史博物館『瀬戸内の中国陶磁』1991年より）

参考図版24(寺町の軒丸瓦)

（広島県立歴史博物館『寺町廃寺と水切り瓦』1998年より）

【スライド10】「ひろしまの渡来系遺物5（飛鳥・奈良時代）」

この寺町廃寺や安芸高田市の明官地廃寺の軒丸瓦の文様は、百済系とされる渡来系のものですし、そのほか渡来系遺物として特筆されるものに、明官地廃寺で出土した銅製指輪（【スライド10】－42）などがあります。それから、明官地廃寺では、唐三彩を模倣した国産の三彩（奈良三彩）の火鉢（火舎）（【スライド10】－参考図版22）なども出土しております。

それから、これは『続日本紀』（797年完成）という書物に記録だけ残っているのですが、福山市と府中市にそれぞれ茨城と常城という二つの朝鮮式山城が築かれていたようです。『続日本紀』によれば「養老3年（719）12月に備後国の安那郡茨城と葦田郡常城を廃止した」と記されています。この二つの城は、朝鮮式山城と考えられておりまして、663年の白村江の戦いの後に、唐や新羅の侵攻に備えて対馬をはじめとして北部九州から瀬戸内・近畿地方にかけて築城された朝鮮式山城のうち二ヶ所が備後南部につくられていたようです。それを養老3年に廃止したというふうに理解されております。茨城は現在の福山市街地北方の山上に、そして常城は府中市街地北方の山上に推定をされておりますが、確実な遺構や範囲は明らかになっておらず、今のところは、まぼろしの朝鮮式山城であります。

では、最後になりますが、平安時代の『日本霊異記』の物語に記されたように三谷郡の大領（郡長）の祖先はなぜ海を渡ったかという問題について、この時代に先行する三次の古墳群のようすなども交えて少し推測してみたいと思います。

三次の古墳群は、規模や形、それから出土品の内容などから考えますと、日本列島への渡来の第1波、第2波の時期、おおよそ5世紀ごろを中心に盆地内に4,000基ぐらいの古墳が築かれているようです。狭い盆地内に4千基もの古墳が爆発的につくられた経緯を考えますと、何かしら渡来の第1波、第2波の渡来人とかかわっていた可能性を考えたくくなります。三次の古墳からは鉄製の武器や武具、鍛冶屋の道具、それから先ほど紹介しましたオンドル状遺構なども発見されておりまして、渡来人が直接来たかどうか確証はありませんけれど、渡来人と交渉があった可能性が十分考えられる

と思います。肝心の663年の白村江の戦い前後のものとして、先ほど御紹介しました三次市吉舎町の梅の木古墳から見つかった渡来系の須恵器ではないかと疑われるものがあります（【スライド11】一下半中央）。これは渡来系の須恵器がたくさん出てくる5世紀の初めごろ、つまり日本の須恵器の始まるのころじゃなくて、日本でもたくさん窯が築かれて国産の須恵器が全国で作られる時期の6世紀末から7世紀前半ごろの明らかな日本の須恵器と一緒に出てきております。梅の木古墳というのは、三次から尾道へ抜ける国道筋にありまして、吉舎町の敷地大橋近くの梅の木交差点という看板のある交差点をちょっと東側に入った民家の庭で見つかった古墳です（【スライド11】一下半右側の写真）。そこから日本の須恵器というには一風変わった須恵器が数点見つかっております。これらを見ますと、わざわざ朝鮮半島から海を渡って交易品としてもってこられた須恵器とは考えられない日常使うような蓋付きの小鉢や小壺であります。これらはもしかすると、この古墳に埋葬された人物かあるいは親しい人が朝鮮

4 三谷郡の大領（郡長）の祖先たちはなぜ海を渡ったか？

(1) 三次の古墳群と渡来系遺物

- 渡来の第1・2波(5世紀)の時期と4000基の古墳が築かれる契機がほぼ同じ。
- 古墳から陶質土器や武器・武具類、鍛冶具などが出土、オンドル状遺構の出現。

(2) 白村江の戦い前後の渡来系遺物

- 梅の木古墳(三次市吉舎町)から、須恵器とともに陶質土器(朝鮮半島南部から持ち帰った可能性もある)が出土。



野稲南9号古墳
から見つかった
瓢形



11号古墳



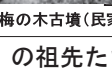
梅の木古墳



梅の木古墳



梅の木古墳の渡来系
の陶質土器



梅の木古墳(民家の庭になっている)

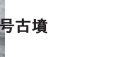


野稲南古墳群

寺町廃寺跡



10号古墳



9号古墳

埋葬主体の見つからなかった野稲南9号古墳

【スライド11】「4 三谷郡の大領（郡長）の祖先たちはなぜ海を渡ったか？」

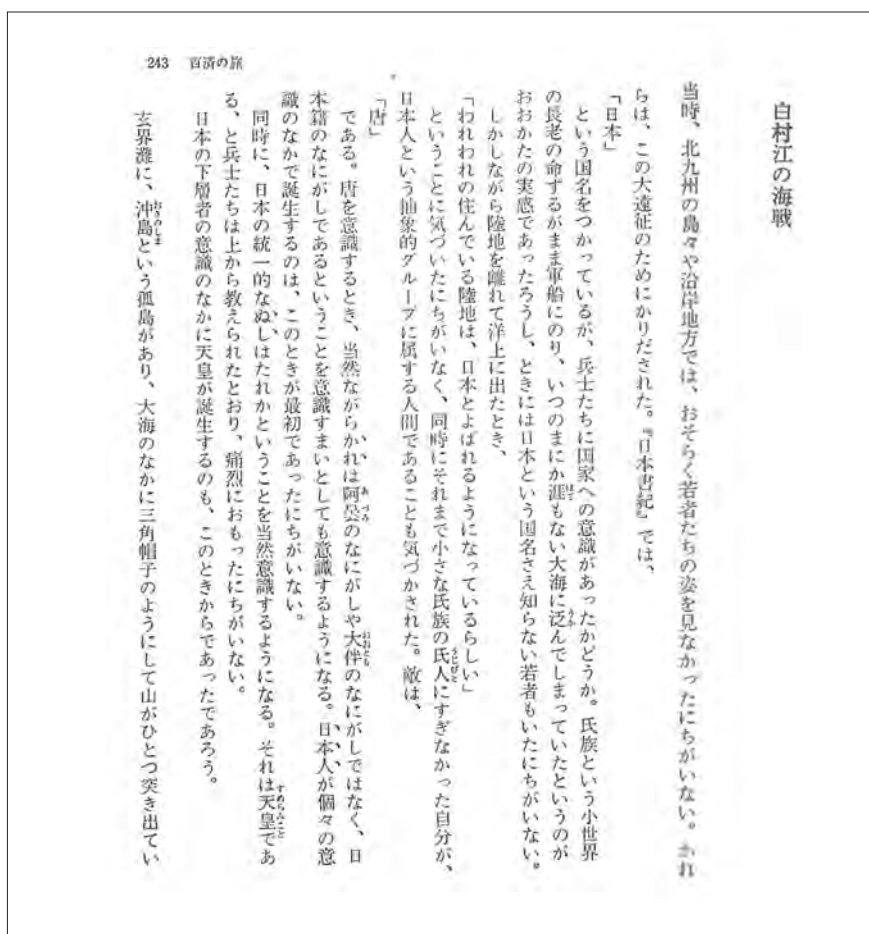
半島に出かけて行って、帰るときに身の回りの生活用具として携えて持って帰った朝鮮半島製の須恵器ではないかと、私は推測しています。

それから、三次の古墳では、非常に珍しいのですけれども、古墳に埋葬痕跡のないものが時折見つかっております。（【スライド11】 一下半左側の写真）は寺町廃寺のすぐ近くの野稲南古墳群の例ですけれども、調査された古墳は4基ほどですが、そのうちの野稲南第11号古墳では、墳丘はかなり立派に残っていたのですが、遺体を埋葬した痕跡、いわゆる木棺の痕跡や遺体を埋葬した穴（墓坑）の痕跡が全く見つかりませんでした。そのかわりに、墳丘の頂上付近にはちょっと変わった須恵器（瓢形甕）が、ぽつんと置いてありました。人の墓として造られた古墳に埋葬の遺体がないというのは、どう考えればいいのだろうかということになりますが、一つの可能性としては、白村江の戦いのような朝鮮半島の有事に倭国の軍隊の一員として参加して、無事に帰って来られなかった人や行方不明になってしまった人のお墓の可能性が考えられるのではないかと考えています。つまり、異郷の地で亡くなったり、行方不明になったりした人の魂のよりどころとして、故郷の親族が古墳を造ったのではないかと、場合によっては野稲南第11号古墳のように遺体の代わりにゆかりの品の須恵器を納めたということもあったのではないかと想像しています。ちょっと実証性のない物語的な想像ですが、こうした想像をすれば、これらの古墳の百数十年後の白村江の戦いに三次から郡長に率いられてこの地域の人たちが海を渡ることになるという流れに、つながっていくのではなかろうかと思っております。これが私の最後のお話しでありまして、スライドは以上でございます。

ここで本当に最後になりますが（笑）、スライド映像では紹介できない「なぜ倭国は唐・新羅と戦ったか」を推測して終わりにしたいと思います。

配付資料6頁（本書の25頁に掲載）の右側に、司馬遼太郎さんの『街道をゆく』シリーズ2の『韓のくに紀行』という中の「白村江の海戦」という章の冒頭部分だけをコピーしております。このなかで司馬さんは、白村江の戦いというのは、当時の日本

列島に住んだ人たちの間に、自分たちは倭国の国民であるとか、国家の一員であるとかの意識がないときに、海を渡って唐や新羅と戦うということによって、倭国の我々……というか、自分たちは唐や新羅と戦う倭国の人だという、国家や国民意識ができたのがこの白村江の戦いの



（配付資料6頁右側 司馬遼太郎『街道をゆく2 韓のくに紀行「白村江の海戦」』（朝日文庫）朝日新聞社1978年より）

大きな意義だったのではなかろうかと言われております。そういう観点から考えると、戦いそのものは大敗をしたのですけれども、その代償として、自分たちは倭国の一員だということが強固に意識されるようになった。これ以後古代国家が成立して、倭国から日本へという古代国家の大きな流れが加速することになります。私も全くそのとおりだと思っております、当時この戦いを指揮した斉明天皇や中大兄皇子（のちの天智天皇）は、このことを計算していたのかどうかはわかりませんが、現代の歴史小説家の眼から見たら、白村江の戦いに至る5世紀以降の倭国と朝鮮半島の国々や中国の王朝との駆け引きは、日本が古代国家を成立させるに至る確実な道のりだったのではないかと思えるのでありまして、なかなか大胆で面白い古代史の見方だと思います。こうした古代の歴史の大きな流れの中で、当時の三次盆地の人たちも倭国の一員との自覚を徐々に持ちはじめ、氏族の結束を固める古墳づくりから始まって、最後に三谷

寺（寺町廃寺）の建立に至る古代的な氏族の形成と成長過程をたどることになるのではないかと想像しています。

時間がだいぶ超過いたしました，以上で終わらせていただきます。（拍手）

研究発表「古代ひろしまの渡来系遺物」 参考文献

国立歴史民俗博物館研究報告第110集『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』2004年

（財）由良大和古代文化研究会『朝鮮三国時代陶質土器の研究』1991年

大阪市立博物館『古代のロマンを求めて日韓文化交流展』1980年

三吉秀充「広島平野出土の初期須恵器・陶質土器に関する基礎的研究」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』2008年

定森秀夫「日本列島出土の咸安タイプ系陶質土器」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』2008年

杉井健「甗形土器の地域性」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 1999年

清野孝之「古墳副葬漁撈具の性格」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 1999年

大阪府立近つ飛鳥博物館『仁徳陵古墳—築造の時代—』1996年

島根県教育委員会『古代の慶尚北道と島根県—鉄文化を中心として—』1993年

新人物往来社『歴史読本2月号（51巻3号） 特集古代日朝関係史』2006年

福山城博物館『ふくやまの古墳時代』2005年

都出比呂志編『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社 1989年

白石太一郎『古代史復元7 古墳時代の工芸』講談社 1990年

千羨幸「西日本の孔列土器」『日本考古学第25巻』日本考古学協会 2008年

太田博之「古墳時代中期東日本の埴輪製作技術と渡来工人」『日本考古学第25巻』日本考古学協会 2008年

野島永『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明—平成17～19年度科学研究費補

助金基盤研究（C）研究成果報告書－』2008年

古瀬清秀『東アジアにおける古代鉄鍛冶技術の伝播と展開－平成12年度～15年度度科学研究費補助金

基盤研究（B）（2）研究成果報告書－』2004年

埋蔵文化財研究会関西世話人会『第34回埋蔵文化財研究集会 古墳時代における朝鮮系文物の伝播
（発表要旨）』1993年

亀田修一『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館 2006年

大谷女子大学資料館編『陶質土器の国際交流』柏書房 1989年

村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店 1998年

亀田修一「渡来人の考古学」『七隈史学第4号』七隈史学会（福岡大学人文学部歴史学科） 2003年

津山郷土博物館『渡来人』2003年

和田晴吾編『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』2007年

和田晴吾『古代日韓交流の考古学的研究－平成11年度～13年度度科学研究費補助金基盤研究（（B）
（1））研究成果報告書－』2003年

亀田修一「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器」『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』島根県教育
委員会 2001年

福岡市埋蔵文化財センター『東アジアと日本－特別考古学講座講演集－』1990年

日韓交流史理解促進事業実行委員会（佐賀県立名護屋城博物館）『日韓交流史理解促進事業調査研究
報告書』2006年

桜井市立埋蔵文化財センター『大陸文化と渡来人－奈良盆地南部における渡来系集団の動向－』2005年

枚方歴史フォーラム実行委員会『検証古代の河内と百済』2001年

大阪府立弥生文化博物館『大和王権と渡来人－3・4世紀の倭人社会－』2004年

大阪府立近つ飛鳥博物館『今来才伎－古墳・飛鳥の渡来人－』2004年

大阪府立近つ飛鳥博物館『河内湖周辺に定着した渡来人－5世紀の渡来人の足跡－』2006年

北九州市立考古博物館『五世紀の北九州－“倭の五王”時代の国際交流－』1989年